

## 浦島伝説における亀と女性を結ぶことについて

顔 詩育

### 1. はじめに

浦島伝説には亀がしばしば登場する。『日本書紀』の雄略天皇二十二年の条には、五色の大亀を釣り上げたという記事が載っている。また『丹後国風土記』の逸文にも亀が姿を現す。『群書類従』の「浦島子伝」、「続浦島子伝」においては、女神が浦島子に近づくために「霊亀」に変身する。亀は浦島子に近づく手段としてだけでなく、報恩譚としてのストーリーにも重要な役割を果たす。例えば、『御伽草子』の「浦島太郎」においては、主人公の浦島太郎はいじめられた亀を助けたため、竜宮に招待されるのである。釣り上げられたにせよ助けられたにせよ、いずれも亀の姿が見える。それに対して、『万葉集』の高橋虫麻呂の長歌では亀は登場を省略し、直接仙女が姿を現す。『万葉集』の一七四〇番の歌は浦島伝説を素材として書かれたという説がある。虫麻呂の長歌を別として、浦島説話においては亀が重要な役割を務めるということが否定できない。

以下は中国の文献から亀のイメージについてみながら、亀のイメージが女性化する過程を考察したいと思う。最初は古代の経典から亀についての記述を見てみよう。

### 2. 亀のイメージ

十三経においては、亀は卜占に使われる道具としてしばしばみえる。特に殷商の時代には卜者は占いの結果を亀の甲や羊の骨に刻みつけた。その結果が「卜辞」（うらないの文句）である。つまり、亀の甲には殷商に関わる歴史や記録などが残っているのである。なお、『史記』の「亀策列伝」には「王者諸疑を決定し、参するに卜筮を以てし、断ずるに著亀を以てす。」とあり、「ほぼ聞く夏股トせん」と欲する者、乃ち著亀を取る。」ともあり、亀が卜占の主体であったことが窺えるのである。

中国古代においては、亀は物を負うという役割を務めており、さらに、天地の間であって、天を支える役割をもたされた。だから、亀は人と神との間の媒介者として、卜占の材料に使用されたのである。しかも、亀と文字との間には深い関わりがあるとされ、亀が文字を背負うというモチーフがみられるようになった。

その顕著な例として『河図洛書』の「河洛の水、霊亀書を負う」という記事が挙げられる。亀は神のお告げぶみを背負うもので、古代の祥瑞思想の中で有力な地位を持つものであった。それゆえまた改元の理由にも使われるようになった。

ト占だけではなく、亀は祥瑞の象徴と認められ、ときに皇帝へ献上されたことは、平勢隆郎氏が『亀の碑と正統』に指摘している。また、『礼記』の礼運に「麟鳳龜龍、謂之四靈」とある。麒麟、鳳凰などの祥瑞を代表するものと並列されることから、亀もまた吉祥物とされたことが分かる。『宋書』の「符瑞志中」に霊亀を神と認める例がある。「霊亀者、神靈也、王者德澤湛清、漁獵山川、從時則出、五色鮮明、三百歳、游於菓葉之上、三千歳、常游於卷耳之上。」という記事がそれである。霊亀は神明として認められるほか、五つの彩色を帯びていて、何千歳も生きることができると述べている。ここに述べられている亀は、『丹後国風土記』の逸文に登場する亀と同じように五色を帯びている。

中国だけではなく、古代の日本においても亀は祥瑞の存在として認められている。例えば、『古事記』、『日本書紀』における神武東征伝承の中に、シイネツヒコがウミガメに乗ってすがたを現した記録がある。カワガメについての記録は史料にはしばしば見える。垂仁紀三十四年三月条には、大亀が河の中からすがたを現したと見え、また、天智紀九年六月条には、ある邑の中から「申」という文字を記した亀が出現した記録が載っている。

さて、亀に文字や図などがあるものとしては、天寿国繡帳が一番名高いと思われる。大橋一章氏が『天寿国繡帳』によって、「天寿国繡帳の亀甲図は亀甲に四字ずつ銘文を記しているから、文字を背負う亀、すなわち洛水から出現した亀と同じで、祥瑞としての神のお告げぶみを背負う亀が天寿国繡帳において造形されたのだ」と小杉一雄の論説を引用して述べている。

また、亀は長命の象徴として人の長寿によく喩えられる。例えば、『抱朴子』の論仙に「謂生必死、而龜鶴長存焉。」とあり、郭樸の遊仙詩にも「借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年。」とみえる。白居易の「效陶潛體詩十六首」に「松柏與龜鶴、其壽皆千年。」と詠われるように、しばしば亀と鶴のイメージを利用し、長寿を表現

する。このように亀と鶴の両者は合わせて用いられる例がしばしば見られる。中国だけではなく、日本においても亀と鶴は長寿の象徴とされた。例えば、『御伽草子』の「浦島太郎」に「生あるものの中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきものなり。」と述べている如きがそれである。

その他、亀の長寿のイメージと神仙思想には関連がみられる。『列子』(湯問第五)には、「渤海の東、幾億万里なるを知らず、大壑あり」といい、すべての水が流れこむこの水中に、「一に曰く岱輿、二に曰く員嶠、三に曰く方壺、四に曰く瀛洲、五に曰く蓬莱」という五つの神山があるという。しかもそれらは全て浮島であり、固定されていなかった。するとそこに住んでいる仙人たちは不安を感じて帝に訴え、そこで十五頭の大亀が五頭づつ交代で神山を支えることとなったという。この記事からは、あたかも亀は山を載せる工具のように見える。

### 3. 亀のイメージと女性のイメージとの結び

上記の文献からは、亀と女性のイメージをつなげる痕跡が見られない。中国の場合において、亀に女性のイメージを重ねる例が顕著にみえるのは六朝の志怪小説である。特に女性が亀に変身する話がしばしば見られる。

例えば『搜神記』には、女性が亀やスッポンにすがたを変えてしまう話が三つ載っている。その中の一つを挙げるならば、

漢の靈帝のとき、江夏(湖北省)の黄という人の母親が壘のなかで行水をしていたとき、いつまでたっても立ち上がらないと思っているうちに、海亀に変わってしまった。女中が肝をつぶして知らせに走ったが、家人がかげつけたときには、海亀は川の深い淵に潜ってしまう。その後、時々姿を現したが、以前行水していたときにつけていた簪と銀の釵が、そのまま頭についていたという。黄の家ではそれから、代々、海亀の肉を食べないようになったという。——母親が亀に変身してしまうというこの話には、女性と亀のイメージの重なりがうかがうことができるだろう。また『志怪』には、亀が女性に変身するだけでなく人間と夫婦の契りを結び子を産むという話柄もみられる。

### 4. 亀姫から乙姫まで

『志怪』に登場する女性には、『丹後国風土記』の亀比売(亀姫と同じ)と類似するところがある。二人ともヒーローを慕い、自分からプロポーズをすることである。異なる点は、『志怪』に登場するヒロインの正

体は亀であり、しかも子どももできるが、最後はヒーローにその正体を見られ破局を迎えることとなる。これも異類婚姻譚によく見られるものである。それに対して、『丹後国風土記』の亀比売は仙女であり、愛情を求めために亀に変身し、ヒーローに接近する。つまり、亀への変身はヒーローに接近するための手段とも言える。

『志怪』のヒロインは浦島伝説の亀姫と似ている。二人とも愛情を求めるとき、積極的に相手に近づくのである。『風土記』に登場する仙女は浦島子を愛で、わざと亀に変身し、釣り上げられるのである。しかも、仙女の身分に相応しくない情熱的な告白を行う。このことにつき高木敏雄氏は、浦島伝説の神女が浦島子に近づくために亀にまで変身することについて、「如何に浦島の美目秀眉に神魂を奪はれしとするも、渴仰する数多の道士を棄て、亀と化して遙々と海中を潜り、丹波なる与謝の入江に出現し、猥褻にも秋波を湛へて漁夫の歡心を哀求するが如き、到底了解すべからざる事に属す」と指摘する。すなわち高潔であるべき仙女が自分から人間の男性にプロポーズするわけがない、ということであろう。

亀姫のイメージは日本における典型的な女性のタイプとは言えまい。日本人にとってもっとも典型的な女神のイメージを有するのはかぐや姫であろう。河合隼雄氏は『昔話と日本人の心』に「肉体性を否定し、結婚の対象としては考えることのできない美人の像とはいえば、われわれ日本人の心にすぐ浮んでくるのは、かぐや姫のイメージである」と述べている。かぐや姫の、五人の貴族たちにプロポーズされながらもすべて断って月の世界へ昇っていくという高潔な仙女のイメージは、自分から強引にプロポーズをするという亀姫のイメージとは全く異なっている。

ふたりの姫のイメージには雲泥の差がある。その隔たりの大きさから見れば、亀姫のイメージには中国の影響を受けた仙女のイメージがうかがわれるとも言えるのではないかと。亀姫のイメージとかぐや姫のイメージの基本的な差異は、肉体性の意味を含めているかどうかということである。亀姫のイメージからは脱却しつつも、いまだ「永遠の少女」のようなかぐや姫のイメージに至らない、そうした女性こそが乙姫である。河合氏は亀姫から乙姫までの変化について、「亀姫の仙女化がすすむにつれ、結婚のテーマが脱落していった」と述べ、しかも、「亀で表されるような女性の肉体性が切りはなされることによって、仙女はますます仙女らしくなり、結婚の対象とは考えられない乙姫像が生じてきたのではないだろうか」と推測する。

## 5. 結論

亀姫のイメージに肉體性がみとめられることについて河合氏は、道教の理想郷と恋愛の理想国を重ねる考えが存在し、浦島説話のなかには『遊仙窟』の影響もみられると指摘する。つまり道教の理想郷の享楽を代表する仙女のイメージに亀姫のイメージを重ねるのである。

浦島伝説の亀姫のイメージには、中国の『遊仙窟』などの小説の影響や、『志怪』などの亀にすがたを変える女性、あるいは女性に変身する亀の話柄などから

ヒントを得た可能性があるのではないかと推測する。

## 参考資料

- 東洋文庫10『搜神記』竹田晃訳1964年 平凡社  
東洋文庫43『幽明録・遊仙窟他』前野直彬等訳 1965年 平凡社  
河合隼雄『昔話と日本人の心』1982年 岩波書店  
大橋一章『天寿国繡帳の研究』1995年 吉川弘文館  
平勢隆郎『亀の碑と正統』2004年 白帝社

がん しいく／台湾大学日本語学科大学院 大学院生